不思議な形の屋根の塔である。屋根は上面と軒下は階段状になり、軒先には火焔宝珠を表した飾りを立てる。この塔は上より下まで階段と緩があるよう、基壇上も四段の階段を作っている。塔身は方形で、各面に三弁の火焔宝珠を飾り、屋根のいただきには相輪を立てている。

この形式の塔は宝篋印塔と呼ばれ、わが国では宝篋印塚陵や舍利を納めたほか、中世以降には墓石としても用いられている。中国・五代（十世纪）に多数製作された銅仏像八万四千塔もこの形式を見させており、おそらくこれが国には中国から伝えられたものと思われ、曲輪の真舎利をまとうとする。中国・寧波の阿育王寺の舍利塔もこの形式をとっていると言われ、中国では仏教の教義にインドからの塔と作られているようである。銅仏像八万四千塔にインド風の浮彫りが表されていることも、このことによく示されている。インドに宝篋印塔とまったく同形式の塔はいまだ見当たっていない。敢えて挙げるとすれば、7〜8世紀のインドの支那＝仏迦尚には、相輪の下に階段状に四重に突起のある両輪を作るものが見られる。あるいはこのような塔が宝篋印塔の起源かもしれない。

この作品は塔身に三弁宝珠を表している。これは内部に安置されている舍利を象徴的に表現したものであろう。平安時代以降、高宮宗を中心に供養を宝篋と同一視する教義が広まっていくことから、この塔は宝篋塔として用いられたことが推測される。

内藤栄（当館工芸考古室長）

西新館 12月8日〜1月14日（月〜祝）

稲本泰生（当館企画室長）

本館

最近発見された携帯用仏像の優品で、内部に三尊仏、涅槃像、薬師像、力士像、観音、供養像などが、非常に細緻な浮彫で彫られている。江戸時代の朱漆器があり、江文時代（1661〜73）の時点で高野山に伝来していたことがわかる。全体が細部を整え、一札を等分して一分を身に着け、もう一分をさらに等分して左右の隻を着ている。薬形・形材様式と中央アジアが濃厚で、タクラマカン砂漠東北で発見された大英博物館蔵品（カラシャール出土）やメソポタミア美術館蔵品（伝ギョッソ出土）などに近く、この地域で制作された可能性が高い。ただし薬形をとる薬師の姿や、観音の渡る渡るの姿など、内部の影響を想定できる要素も見られ、当館における東西文化交流のあらがえがうかがえる。

薬形という「弘法大師作」という伝承は信じたいものの、中央アジアの薬形のうち、薬形を三分割するタイプでは世界唯一の完存例であり、珍貴な仏像と同じような製品を訪れる観客に喜ばれる。薬形をもって、薬形も较小な仏像の製作を促進することができる。